Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-07-19

現代中国における農民出稼ぎと社会構造変動に関する研究ー農民出稼ぎ者・留守家族・帰郷者の生活と社会意識に関する実態調査をふまえてー

江，秋鳳

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2012-03-25
(Date of Publication)
2012-10-24
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲5568
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005568

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　江　秋鳳
専　　攻　人間環境学
指導教官氏名　浅野　慎一

論文題目（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

現代中国における農民出稼ぎと社会構造変動に関する研究
――農民出稼ぎ者・留守家族・帰郷者の生活と社会意識に関する実態調査をふまえて――

論文要旨

本論文の課題は、現代中国における農民出稼ぎ者・留守家族・帰郷者に関する実態調査をふまえ、諸個人の生活・社会意識の変容、および都市と農村をつなぐマクロな社会構造変動の関連を明らかにすることにある。

1978 年以降、中国の農村では生産請負制の導入に伴い、農業技術の進歩、農業機器の改良が急速に進み、農村労働力の余剰化が顕著となった。またその後、中国は驚異的な経済成長を遂げ、特に北京・上海・経済特区および東部沿海地区では労働力不足が深刻化した。こうして農村から都市への巨大な人口流動が必然的に生まれた。中国国務院『中国農民出稼ぎ労働者調査研究報告』によれば、2007 年、都市への農民出稼ぎ者数は約 1 億 5 千万人に達する。こうした農民出稼ぎ者は、16～40 歳の青壮年層に集中し、平均年齢は 28.6 歳である。男性が 66.3%、女性が 33.7%を占め、女性には未婚者が多い。その結果、中国の農村には妻・子供・高齢者だけが取り残される現象が、広範にみられる。

一方、1990年代からすでに、農民出稼ぎ者の農村への回流も発生していた。90年代後半には、国有企業改革によって大量に発生した都市失業者の雇用が優先され、農民出稼ぎ者は就職難になった。2002年11月、中国共産党第16回大会において深刻な農業・農村・農民問題が提起され、農業税の撤廃や農村義務教育の無料化、農民の負担を軽減する恵民政策が実施された。2006年には、「新農村建設計画」が始まり、中西部の農村地域にも新たな雇用と人材需要が創出された。小城鎮建設や地方経済の活性化のため、帰郷した農民出稼ぎ者に対して、農村のインフラ施設建設への参加を奨励する政策も実施された。帰郷した農民出稼ぎ者の起業に対する一連の援助策も講じられた。さらに2008年後半以降、国際金融危機の影響で外需が減少し、中国の沿海地区で主に輸出産品の製造業企業が経営難に直面している。これを契機に、農民出稼ぎ者の帰郷傾向はさらに拡大している。『人民中国』（2009年8月号）によれば、「2009年の春節に総民工数の1/3である7000万人が帰郷したが、そのうちの2000万人は失業して帰郷した」という。

本稿は、このような都市への出稼ぎの流出、および農村への回流がもつ社会的意義を、出稼ぎ者・帰郷者・留守家族の三者の生活と意識の実態をふまえ、明らかにするものである。

素材とする調査は、①2007 年 9 月、北京市で実施した農民出稼ぎ者本人に対する調査（男性 34 人、女性 17 人、計 51 人）、②2009 年 8～9 月、山東省鄆城県で実施した留守家族の調査（出稼ぎ者の父母 21 人、出稼ぎ者の妻 26 人、子供も夫も出稼ぎに行っている 6 人、計 53 人）、そして③2010 年 9 月～10 月、山東省鄆城県南趙楼で実施した帰郷者の調査（男性 28 人、女性 5 人、計 33 人）である。いずれもインテンシブな面接聴き取り調査であり、トータルな生活過程を把握する質的調査に不可欠な信頼関係の必要により、対象者は機縁法で確保した。

調査研究で明らかになったことは、以下のとおりである。

まず出稼ぎの動機は経済的事情に加え、特に若年層では「視野の拡大」や「新しい技術の習得」など、自らの成長・発達の希求にある。また出稼ぎは、農村から都市といった一方向への移動ではなく、都市と農村を振り子のように往復しながら行われている。農業生産の衰退、都市生活への不適応、帰郷後の起業の失敗、次世代の教育などの理由で、農民の出稼ぎと帰郷は個々人の中で複雑に錯綜しながら行われている。

農民出稼ぎ者は、都市で“3K”労働に従事し、解雇・失業に陥ることも多く、サービス残業を含む長時間労働、農村出身ゆえの差別、孤独など、多くの問題に直面している。しかしそれでも、多くの農民出稼ぎ者は都市で、農村では経験できない種種の仕事の経験を積み、専門技術・知識を身につけており、帰郷後、それらを生かして実際に起業するケースも少なくない。農民出稼ぎ者は単なる受苦の客体ではなく、自らの人生を切り開こうとして発達する主体である。子供・次世代に対しても、一般的な学歴だけでなく、専門的な技術・知識を習得させようと考えている。

一方、農村に残った留守家族たちにおいては、さらに絶望が深い。生活が不安定化し、最低限の治安維持や賃金の支払いさえ困難になりつつある農村では、そうした農村から脱出するしか展望が開けないとの認識が強い。政府に期待しても問題解決は望めない。出稼ぎ者が子供の教育費を送金し、都市でますます教育・専門知識の重要性を認識しても、農村に残された子供たちの側は学習に興味を失い、早く出稼ぎに出ることを望むといった矛盾した現状がある。

出稼ぎ者は、都市では都市市民と隔離され、疎外された生活を送っている。こうした疎外は、彼・彼女らが帰郷にふみきる最大の要因である。特に既婚で子供がいる出稼ぎ者は、早めに出稼ぎを中断する傾向が強い。帰郷者は、農村で起業することにより、一定の生活水準と満足を得ている。しかし将来の子供の教育費・老親の扶養費等を考えると不安も大きい。子供・次世代に対しては、やはり農村からの脱出を期待せざるを得なくなっている。

総じて中国の農村では、出稼ぎ者の送金、または帰郷者の起業による収入を抜きにした生活は考えられない。高齢の父母の医療費、子供の結婚資金、生活費・子供の教育費など、農業や地元の兼業による収入だけではとてもまかなえない。農村医療制度が新設されたといっても、ほとんどの農村住民はこれに関する正確な知識をもたず、また知識をもっていても実際に適用されない場合が多い。単に現時点の収支が黒字であればよいのではなく、いざという時のために多額の貯金ができなければ、農村での安定的な生活は成り立たないのである。

多くの留守家族は、出稼ぎの送金によって確かに生活が改善されたと考えている。出稼ぎ収入がなければ、電化製品の購入費、家屋新築費、子供の教育費は確保できなかった。しかし、ここでいう「改善」は決して、より生活が安定したという意味ではない。むしろ極めて不安定な経済状況を余儀なくされる中で、出稼ぎの送金によってかろうじて生活を維持し、いざという時のために備え

ているという方が、実態に近い。

出稼ぎ流出の増加に伴って、農業の衰退も顕著である。基幹労働力が出稼ぎに出て、農業生産の労働力不足が顕在化し、高齢の父母や妻など留守家族に過重な負担がかかっている。農産物のモノカルチャー化、農薬の多用化もみられ、これが一方で農業の高コスト・低収入化に拍車をかけ、他方で留守家族の健康破壊ももたらしている。農業の低生産性・費用対効果の低さが出稼ぎを不可欠にし、出稼ぎが農業生産をさらに困難にするといった悪循環がある。帰郷者も多くの場合、農業以外の仕事に従事し、農業には消極的である。総じて留守家族や帰郷者は、自給自足の分だけは農業を続けているが、現金収入の糧として農業生産を発展させる志向はほとんどもっていない。

また農村では、子供の世話、老親の扶養・介護、農業生産、治安確保等の必要から、父母と妻の共働、また同居化が進展している。出稼ぎが、一種の「拡大家族」化をもたらしているのである。これは伝統的な家族形態への復帰ではない。むしろ農村に取り残された女性・子供・高齢者の、自己防衛の営みといえる。妻は、遠隔地にいる夫との心理的距離に悩まされ、一部には実質的な家族崩壊の危険を感じているケースもある。ここでみられる女性の「自立」や意志決定権の強化は、安定した生活の崩壊の中で個々人に選択の余地なく押し付けられたものである。子供の性別についても、男児（後継ぎ）にこだわらなくなっているが、これももはや男児の存在が老後の生活保障や生業の継続を意味しなくなっているからである。もとより、近代における女性の自立・男尊女卑の払拭が、決して明色に彩られた選択的なものではなく、自給自足的農業生産に基づく安定した生活の崩壊、市場経済の渦中での貧困化と不安定化・孤立化の中で、個々人に選択の余地なく押し付けられるものであるとするならば、現在の中国の農村では確かにそれが着実に進んでいる。

農村の社会構造も変貌が著しい。出稼ぎ者の流出に伴い、農作業での共同、困った時の助け合いなど、必要に迫られた隣人関係が一層、強化されつつある。出稼ぎ先で培われた新たな社会関係が、農村に持ち込まれているケースもみられる。しかしその一方で、村内の人間関係は着実に疎遠になっている。また、女性・子供・高齢者だけが取り残された農村社会では、治安の悪化が極限まで進みつつある。帰郷者は、以前の素朴で純粋な人間関係が農村から失われ、商売上の競争の激しさ、押金主義、見栄えの張り合い、賄賂の横行、隣人への不信感の増大が進んでいることを実感している。こうした現実に触れることにより、多くの帰郷者は、せっかく戻ってきた農村がもはやとどまるべき場所ではなく、脱出すべき場所だと最終的に判断しつつある。特に若年層の出稼ぎ者・帰郷者には、もはや農業に従事した経験がなく、将来的にも農業に無関心な人が多い。こうした農村の厳しい状況、および政府の度重なる農村改革の政策が実際にはほとんど功を奏していない現状をふまえるならば、今後、帰郷者や出稼ぎ者の家族に、村にとどまろうと思わせる誘因はますます乏しくなるだろう。

実際、多くの留守家族は、政府に対して、最低限の治安の維持、および出稼ぎ先での賃金不払いの防止を望んでいるが、それすら実際には困難であるといった諦観に陥っている。帰郷者も、「公平・公正」を政府に期待しているが、しかし実際には政府内の人間にコネがあるか否かが、村内での活動に大きな影響を及ぼしている。特に起業した帰郷者にとって、これは死活問題である。そこで帰郷者にも、政府に期待しても無意味だと締めている者が多い。農村に居住する留守家族や帰郷

者の多くが、農村の現状変革に展望を見いだせず、子供の世代には農村社会から脱出するしかないと考えざるをえない点に、現在の中国の農村の深刻さが示されている。出稼ぎ先の都市生活で疎外され、出稼ぎ者の中には故郷である農村での生活を大切にしたいという気持ちが膨れあがってくる。しかし、実際に農村に帰郷し、農村の現状に触るなかで、今度は最終的に農村に見切りをつける気持ちが湧き上がってしまうという皮肉な結果が生まれている。都市にも農村にも居場所を見つけられない自己の発見である。[21]

現代の中国社会では、確かに出稼ぎにより都市・農村双方での工業化・近代化が進展している。都市において出稼ぎ労働者の低賃金労働を抜きに、大規模な製造業・建設業の発展はありえない。農村でも出稼ぎの送金・貯金により、電化製品・家屋の購入が進み、子供の教育熱も高まっている。帰郷者による起業も、表面的に活発であるようにみえる。そこには都市で習得した技術・知識、および出稼ぎによって獲得した資金が投入されており、確かに出稼ぎが農村の活性化に資しているようにみえる。しかしその一方、農村において、工場の増加による空気・水などの汚染、農薬の乱用などによる新たな衛生状態の悪化、奇病発症、食品安全への不安、貧富の差の拡大、押金主義の蔓延、治安の悪化、隣人への不信感の増大、子供の社会化の不全など、負の要素も急速に膨張している。そして同時に、文化水準の低さ、人間関係の煩わしさ、家柄による差別など、伝統的・因習的な要素も依然として残存している。土地貸与契約のずさんさ、村民間での見栄の張りあい、コネ・賄賂の横行など、古い因習と新たな金銭至上主義が結合した矛盾も多い。帰郷者による起業も、決して農村での将来にわたっての安定的生活を作りだせるようなものではない。

総じて農民出稼ぎという現象は、単に金銭や技術を農村に流入させ、新たな経済発展を農村にもたらすか否かといった単純な問題ではない。それは、都市と農村の格差に特徴づけられた中国社会の構造そのものによって生み出された社会現象である。したがって出稼ぎがもたらす「近代化」は、脱封建・脱旧社会といった明色の「近代」ではなく、苦汁と不安に満ちた「近代」にほかならない。こうした「近代化」は、農村を現実に荒廃・空洞化させつつある。また、「近代化」が進んだ都市での生活に翻弄され、居場所を失って農村に帰郷した出稼ぎ者が、帰郷後、目の当たりにする農村も、もはや魅力的な場所、安定した居場所とは捉えられなくなっている。今や、既存の都市と農村の構造を自明の前提とした上で、都市での出稼ぎ体験が農村社会にもたらす「メリット」や「デメリット」を論じるレベルの議論は、もはやそれ自体有効性を失ってきている。出稼ぎ農民・留守家族・帰郷者が、出稼ぎという体験・挑戦を通して得た最大の成果は、そのような社会認識に到達したことにあるといえよう。[22]

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	江　秋鳳		
論文題目	現代中国における農民出稼ぎと社会構造変動に関する研究 —農民出稼ぎ者・留守家族・帰郷者の生活と社会意識に関する実態調査をふまえて—		
判　　定	合　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	浅野　慎一
	副　査	教授	山崎　健
	副　査	教授	岡田　章宏
	副　査	准教授	澤　宗則
	副　査	准教授	太田　和宏

要　　旨

本論文は、農民出稼ぎ者・留守家族・帰郷者（計137名）に対するインテンシブな面接聞き取りと参与観察に基づき、現代中国の人口流動の社会的意義を考察したものである。調査は2007～2010年、①北京市、②北京市に多数の出稼ぎ者を送出し、農民世帯の殆どに出稼ぎ者がいる山東省鄆城県、③近年、出稼ぎからの帰郷者が増加している鄆城県南趙楼で実施した。方法上の特徴は、諸個人の生活史・生活過程、社会関係、社会意識、およびそれらを貫く主体的な意識や行為をトータルに把握し、社会構造変動の内在論理を考察する生活過程論アプローチにある。

農民出稼ぎは、経済的貧困からの脱出だけでなく、多面的な自己実現を求める主体的行為である。出稼ぎ先では、解雇、長時間の重労働、労働災害、差別、孤独等、深刻な問題がある。しかしその中でも出稼ぎ者は、新たな技能を習得し、貯金・送金を確保し、都市と農村の格差について視野を広げ、新たな社会関係を構築している。留守家族は、物価上昇や医療・教育の市場化による支出の膨張を、出稼ぎの送金でかろうじて埋め合わせている。

出稼ぎをやめ、帰郷する者もいる。そこには、①都市での苦難と都市定住の断念という消極的動機、および②農村での起業準備完了という積極的動機がある。帰郷者は農村で起業しているが、経営は厳しい。また地方政府による違法な土地利用許可に基づく起業が多く、極めて不安定である。

出稼ぎ者の流出は、子供の世話、老親の介護、農業生産、治安維持等の必要に基づき、核家族の減少・拡大家族化を促している。これは、伝統的な家父長制の復活・強化ではない。留守を守る女性の発言権・意志決定権は、強まっている。出稼ぎ先で炊事・洗濯・掃除等を自ら行った男性は、帰郷後も家事に参加している。「養児防老（長男が両親と同居して扶養）」や「跡継ぎとしての男児」といった伝統的意識も希薄化している。

しかし、こうした「近代化」は、苦難と裏表一体である。夫が出稼ぎ中の妻は、農業・家事・育児・介護の過重負担に苦しみ、夫との心理的距離・孤独に悩んでいる。長期の離別・帰郷後の起業者の多忙が、家族崩壊をもたらす場合も多い。「養児防老」や「跡継ぎ=男児」意識の希薄化は、男児がいても老後の保障にならない現実の反映である。元来、近代における女性の自立は、市場経済に根差す貧困化・不安定化・孤立化の渦中で、個々人に選択の余地なく押し付けられる。その意味で、中国農村家族は確実に「近代化」しつつある。

出稼ぎの流出に伴い、農作業・起業・生活の必要に迫られた村内の共同も一部で強化されている。しかし従来からの人間関係は明らかに疎遠化している。貧富の差、拝金主義・隣人への不信感の拡大の中で、治安は極度に悪化している。行政による違法な土地貸与、行政や教育機関でのコネ・賄賂も横行している。現代中国農村で進行しているのは、旧制度と癒着した「近代化」である。

出稼ぎ者・留守家族・帰郷者は、行政に対し、人身・財産の安全、法律の遵守・公正な運用等、最低限の要望しかもたず、しかもそれすら「期待しても無駄」と諦めている。そこで自分の子供には農村脱出・都市定住を期待するしかないが、その困難さもまた自らの体験で熟知している。

出稼ぎ者・帰郷者は、都市にも農村にも安住の地をもたない新たな住民へと生まれ変わりつつある。これは中国における都市と農村の二重構造が作り出した矛盾であり、同時にその二重構造が限界に近づいていることを示している。出稼ぎ者・留守家族・帰郷者は、自らの労働・生活を通して、そうした矛盾を認識しつつある。起業の成功・子供の農村脱出といった個人的上昇志向にとどまらず、こうした構造的矛盾の認識の形成の中にこそ、最も本質的な主体形成がみられる。そしてそれが可能なのは、彼・彼女らが単なる低賃金労働力ではなく、生活の向上・発展を求め、社会の矛盾を見抜く発達の主体だからである。

これらの知見は、出稼ぎ者・留守家族・帰郷者の三者をトータルに、しかもその全生活過程をふまえることによって得られ、先行研究ではほとんど解明されていなかったものである。

本論文の一部は、江秋鳳「現代中国における農民出稼ぎ者の生活実態と意識変化」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』4-1(2010)、江秋鳳「現代中国農村における出稼ぎ農民留守家族の生活実態と意識変化」『同』5-1(2011)に、いずれも審査付き学術論文として掲載されている。

以上をふまえ、審査委員は全員一致で、学位申請者・江秋鳳は博士（学術）の学位を得る資格があると認める。